

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Sun Jie
出身地：中国、北京
所属：中国社会科学院世界経済与政治研究所
日本滞在：2009年5月～11月

日本の近世という歴史的に重要な時期に侍が果たした役割に関心を持ったのは映画「ラスト・サムライ」を見てのことだ。同じ時代に中国も近代化への変革の道を行っていたが侍精神に私は感銘を覚えた。映画の最後で敵の容赦ない攻撃に向かつて決死の覚悟で突撃する侍の姿に感動した。これはハリウッド監督スウィックが抱いていた侍像であつたろう。だがこのような英雄像は日本独自のものではない。来日後、須坂を訪れる機会があり質素な武家屋敷と贅を尽くした商家とのあまりのちがいに驚いた。平安時代から武士は農民から税を取り、兵を徴するなど常に支配者として君臨してきた。公の場では立派な出で立ちで現れることが求められたが日常生活は質素倹約に徹した。武士は戦に敗れると自刃するのが普通だ。会津を訪れた際も典型的な史話を聞いた。一八六八年、二〇歳にも満たない会津藩士たちが「白虎隊」を結成して官軍に立ち向い一カ月間の奮戦のあけく全員が作法に則り自分の腹を切り死んだのだ。ハラキリと呼ばれる。この行動は何かしっくりした場合の謝罪ということでは説明がつかない。会津若松にある侍村では武家の女性全員―妻と二歳、五歳、九歳、一三歳、一六歳の五人の娘達―が家の断絶後も家格と面目を失わないようこれ以上抵抗せず潔く敵に討たれたいと懇願する場面が人形で再現されている。わたしはまたショックをうけた。

侍の精神

「完璧！すべてが完璧だ！」はラスト・サムライでの勝元の最期の言葉だった。負け戦でほかの武將が斃れていく中、彼は仲間を介錯され自害した。侍は自分のやるべきことをわきまえており決して逃げようとしな。戦場で殺されなければ彼らは自刃することを望む。それは勝利、勇気、忠誠を超越した探求である。名誉に関わる根本的なもの、そして当然完全無欠さへの探求だ。侍の運命は輝かしい悲劇だ。「桜は想像を絶する美しさを期待させるがそれは一生のうちのほんの一瞬だ。」と勝元が桜を評したが武士も同じだ。「人間は殺すことはできる、しかし負かすことはできない。」この言葉はヘミングウェイの「老人と海」の有名な一句を想起させる。侍にもあてはまる言葉だろう。人間は精神的には打ち負かされることはないということだ。武士階級が消滅したことは日本の文化にとって悲劇だったともいえる。明治の新帝国政府の始まりは近世日本の画期であった。中国の古いことわざに「遺恨をはらすに一〇年待つても遅くはない。」というのがある。仇を討つためにはどんな逆境や孤立というに耐え抜くべし、またそれが可能だということだ。意趣返しに機会がきつと訪れると。歴史を諸諺的にみれば西欧列強の侵略に直面し、中国は国力を増強させるため自ら課した苦難を耐え抜くことを信念として敵と戦うことを選択した。一方、武士道の伝統を持つ日本は中国と同様の状況に

遭遇しながら、侵略者と協力していく道を選択した！内戦の終結と武士階級の消滅で侍精神は彼ら子孫に受け継がれた。それは家紋などの外形的なものではなく、精神の内に継承されたのである。抽象的な武士道精神は日本人の国民性の核となり日本人に勤労精神と自発性を身につけさせ、第二次世界大戦後の経済的な成功につながった。物質的な人間はそれなりの期間でできあがる。一方、理想的な人間はまるまる一生が必要だ。先進技術が売り物の米国に対し、日本は伝統的な文化の力がある。（日本も技術の進んだ国ではあるが。）ベネディクトは代表作「菊と刀」で階級、名誉、徳目、義理が日本文化を強く規定しており、公でのふるまいの規範として敏感に働いているという。剣と菊、戦闘的と非暴力的、軍国主義と美意識、傲慢さと丁寧さ、頑固さと順応性、周囲の動きに対する反発と従順、不誠実と誠実、臆病さと勇敢さ、進取の気性と保守性、等々は互いに相容れない組み合わせである。しかし日本人の文化ではこれらは矛盾なく融合し日本文化の一部を形成している。私には驚きの連続である。デュルケムは自殺は四つに類別できると言う。利己的、利他的、反社会規範的、そして宿命的な自殺である。深い洞察であるが切腹はどの部類にはいるのだろうか？「武士的自殺」というのが五番目にくるのかもしれない。

（海外客員研究員／訳＝真田孝之）

孫 杰